



21年ぶりに開催した国際微生物学連合2011会議を振り返って

(国内組織委員会委員長) 富田 房男

はじめに

私にとってこのような微生物学分野でもっとも歴史のある国際会議の国内組織委員会(以下NOC)委員長を務めさせていただいたのは真に名誉であり、光栄なことであった。今回のまとめも日本生物工学会のご好意によるもので真に有り難いことと感謝している。また、このような大きな会議は一人でまとめることは不可能であり、それぞれの分野を分筆下さった片岡、中根、三上、野崎、小池・俣野の各先生にお礼申し上げる次第だ。これらの先生は当然ながらこの会議を成功に向けて将に粉骨砕身献身して下さいましたことに改めてお礼を申し上げます。

日本開催決定の経緯

最初に、このような役目を下さったのは篠田純男先生(NOC副委員長)だ。当時学術会議の微生物学研究連絡会議委員長の篠田先生も日本でこの会議をも主催できないことを憂慮され、まず私に国際微生物学連合(International Union of Microbiological Societies, IUMS)の副会長に立候補するように、しかも日本に会議を誘致するようにとのご指示があった。多少の躊躇はあったが、篠田先生と同じ思いもあったので立候補した。篠田先生を始めとする多くの方々のロビー活動が功を奏し、副会長になった(2002年)。就任後直ちに国際的に微研連委員長篠田先生の意を受けて日本への誘致を行い、理事会ではスムーズに決定された。サンフランシスコでの総会では、知日家の会長Julian Davies氏のもとで長い間アジアで開かれなかったこともあって暗黙の了解を得られるようになってきており、対抗馬もなく自然の流れの中で日本・札幌開催が決まった。

21年振りの会議開催と日本微生物学連盟の設立

これで21年振りの日本(アジア)開催ができることになった。第1回は1930年であり、その後数回日本で開催されたが、1990年の大阪での開催以来開かれていないためその準備には、やや戸惑いもあった。また、札幌で開くことにしたことも新しい試みであった。特に大きな問題は、学術会議の改組および資金的な問題であった。我が国は世界に例を見ない多くの学会がそれぞれ独自に

IUMSに参加していたため日本の窓口がはっきりしなかったこともあった。微研連がなくなり、NOCは新たに日本学術会議の中のIUMS分科会および総合微生物科学分科会に属することとなった。一方、2002年頃から微研連で検討してきていた微生物学分野の学会の連盟を設立する議論が進み、2008年2月に結成された日本微生物学連盟に属することになった。これが我が国の窓口となり、学術会議と共催で会議をもつこととなったが、新連盟の最初の仕事がIUMS会議の開催であり、かつ新連盟を始動させることが重なり、やや混乱のスタートとなったことは否めない。しかし、微生物学関連分野をまとめたことは今後に向けての大きな動きであった。

日本の経済状況と東日本大震災

もう一つの問題は、我が国は失われた十年ともいわれる経済不況の中ではたして資金が集まるのかが大きな問題であった。これについては、NOCの委員、特に募金を担当下さった岩本先生には大きな任務を負わせることになってしまった。また、2011年3月11日には、東日本大震災、福島第一原発の事故が起こり、大危機に直面した。そこで、「失われた十年」も回復できないまま、失われた二十年になってしまった。それに加えて放射能汚染の風評被害が世界中に広まってしまった。実質的な被害などを考慮し、3度にわたる要旨・早期登録の延期や環境庁、観光協会、札幌市長の応援もあって、これらの風評による減少を回復した。特にアジア(韓国、中国など)の参加者が減らなかったどころか大きく増加したのは我々の大きな応援になった。一方、米国の100名近くのキャンセルを回復できなかったのは残念でならない。それでも4800名の参加は、これまでの最高の参加者であったことは、皆様の微生物学に対する熱意の結果と感謝している。本当に参加者数・資金面で会議終了まで薄水を踏む思いであったことは皆様の共通の認識であった。

難局を乗り切って下さった方々へのお礼

ここに改めてNOCの皆様(敬称略、降順:天知誠吾(中途就任)、今中忠行、岩本愛吉、上田一郎、春日文子、亀井克彦(中途退任)、篠田純男、清水 昌、永田恭介、平山壽哉、堀井俊宏、三上 襄、光山正雄、八木澤守正

(中途退任)、野本明男)とIUMS副会長永井美之先生(札幌会議担当)に深謝する。特に当初の事務局長八木澤守正先生には、イスタンブールに参加頂き、あらゆる面を検証され、それを本会議の開催に向けて最大限活用くださった。しかしながらご健康の問題から、中途退任されたことは真に大きな痛手であった。「亡くなって初めて分かる親の力」にまさに当たるものであった。後任の天知誠吾先生は、難しい役をよくこなして頂き感謝に堪えない。また、Mycology Divisionのプログラム担当の亀井先生もその任期の途中でやはりご健康の問題で退任された。本当に申しわけない難しい調整をお願いしていた。重ねて感謝申し上げます。後任の三上 襄先生には、難しい後処理をお願いした。心よりお礼を申し上げます。また、野本明男先生は、会議直前にがんが発見され、その治療のため会議にはご出席いただけなかったことは誠に残念であった。その成果を見ることができかった無念さを心よりお察し申し上げます。

天皇陛下ご臨席の記念式典と 今回の会議への多くのご支援

今回の会議では「The Unlimited World of Microbes, 限りなく広がる微生物の世界」をメインテーマに、これまでにない寄生虫分野にも参加いただいた。

それぞれの分野での様子は、それぞれの担当者の報告があるので、これらに入らない全般的なところを以下に簡潔に記載する。会議は、日本微生物学連盟と日本学術会議の共同開催とし、学術会議からの支援に加え、札幌市、北海道からの支援を受け、また、各種の学術支援団体、財団、社団、企業、篤志家からも支援を受けて開催することができた。開会式では、日本学術会議唐木英明副会長からの開会の辞(写真1)をいただき、盛大に開催できた。また、アンサンブル・ハイスアンケル(ホルン四重奏)による開会演奏で盛り上げていただいた。会議は、IUMSの有馬賞を受賞された大村智先生の受賞講演をもって開始された。有馬賞は、応用微生物分野で顕著な業績をあげた学者を表彰するもので、日本からただ一人のIUMS会長を務められた有馬啓先生を記念しての賞である。

今回の特別なことは、天皇陛下をお迎えしての記念式典(写真2)と記念懇談会(写真3,4)をもてたことであった。まさに望外の喜びであり、広渡清吾学術会議会長からのお言葉もいただいた。記念式典には約700名、記念懇談会には約130名の内外の著名な方々のご参席を得、我が国はいかに微生物学の分野を重要視しているかを示すものであった(写真5)。またさらに今回は、これまでにない寄生虫分野にも参加いただいた。多くの微生物学

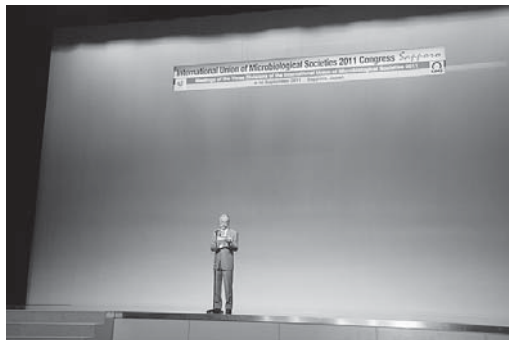


写真1. 唐木英明学術会議副会長の開会挨拶



写真2. 天皇陛下ご臨席での記念式典



写真3. 記念懇談会



写真4. 天皇陛下とともに

の教科書には寄生虫も取り込まれていることが多いことを考えると、今までともに交流する機会がなかったのが不思議であり、今後とも継続して一緒にやれることを期待したい。

また、アウトリーチアクティビティを重視して、これまでにない試みとして、高峰譲吉-北里柴三郎シンポジウム、市民公開シンポジウム(写真6)、高峰譲吉-北里柴三郎展示(第90巻4号の談話室202頁)(写真7)、小中高校での出前授業(写真8)を行った。

我が国が得意とする応用微生物学の分野の大きな貢献者であるグルタミン酸発酵の発明者であり工業化に成功された木下祝郎博士が今回のIUMSの開催を心にかけておられたが、昨年3月19日に逝去されたのは残念なことであった。3月11日の大震災の影響をことのほか心配しておられた。Dr. Arnold Demain, 清水昌先生のご同意を得て、木下祝郎博士のご功績を讃え、故人を偲んで両氏の招待講演を「木下祝郎博士記念シンポジウム」にできたことは大変記念すべきことであった。

その結果、厳しい状況にありながらも1996年エルサレム:3000人、1999年シドニー:4000人、2002年パリ:4000人、2005年サンフランシスコ:3000人、2008年イスタンブール:2100人に対して、今回2011年札幌:4800人(国外1450人、国内3350人)と1996年以来最高

の参加を得ることができたのは大きな成果であり、成功を収めたと言える。ここに改めて心より関係者にお礼を申し上げます。

次回は、モンリオール(カナダ)で2014年7月27日から8月1日の開催だ。もう案内が出ている。このサイト(<http://www.montrealiums2014.org/>)をご覧ください、ぜひ参加されたい。

運営に当たった(株)コングレへのお礼

最後に、会議の運営をした(株)コングレにお礼を申し上げたい。同社の運営で会議は、きわめて効率的に進められた。特に今回からできるだけ電子化することを試みた。初めてのことで心配もあったが、電子化により、紙媒体は、プログラムのみとし、要旨はDVDとした。この結果、抄録集のCD-ROM化による紙の節約について、CD-R 4800部全体で全版のサイズ(縦625×横880ミリ)の紙254,000枚が節約された計算となる。節約も大きな成果と言えるが、参加者のメルリストを次回に申し送りできたことはもっと大きな成果と言えよう。また、郵送料を節約したことも大きなプラスと考えている。

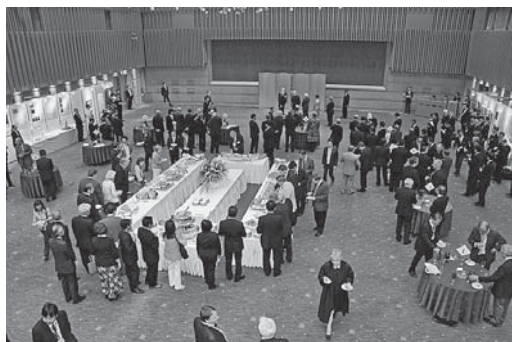


写真5. 記念懇談会会場



写真6. 市民公開シンポジウム



写真7. 高峰譲吉-北里柴三郎展示



写真8. 出前授業(小学校)